



営農NEWS



ミズナ栽培における主な病害虫の防除

茨城県のミズナ栽培は、ハウスを利用した周年栽培が主体です。

ミズナは比較的病害虫の発生が少ない作物ですが、周年で長期に連作栽培すると、土壌病害の立枯病や尻腐病、萎凋病、根こぶ病、軟腐病などが発生しやすくなります。また、茎葉病害では白さび病や炭疽病、黒腐病など、害虫ではキスジノミハムシ、アブラムシ類、ハモグリバエ類、コナガ、アオムシ、ヨトウムシ類、ハイマダラノメイガなどが作期により発生します。

作期によって、病害虫被害の発生が大きく異なりますので、作期ごとに、適期で的確な防除体系を組み立てることにより、高品質で安定したミズナ生産に努めてください。

<病害虫発生の特徴>

冬季の栽培では病害虫の発生が少ない傾向ですが、春または秋の低温多湿のときには、白さび病や黒腐病など茎葉病害が発生しやすくなります。また、土壌病害として圃場が多湿のときに立枯病や尻腐病、根こぶ病などの発生がみられます。さらに近年は、フザリウム菌による土壌病害のキョウナ（ミズナ）萎凋病が発生しています。萎凋病は、7～9月の高温期に発生が多い傾向です。

害虫では、キスジノミハムシが夏季を中心に長期に被害が発生し、アブラムシ類やハモグリバエ類は春と秋に発生しやすくなります。チョウ目幼虫のコナガやアオムシ、ヨトウムシ類も春と秋を中心に発生しますが、ハイマダラノメイガは夏季～初秋に被害が集中します。なお、これら害虫の防除が手遅れになると、大きな減収を招きます。

<防除対策のポイント>

ミズナには登録薬剤が少ないため、薬剤防除のみに頼らない総合防除が必要になります。多湿条件が病害の発生を助長するため、圃場の排水不良を改善し、高畦栽培を行い、過度の灌水を避けて適度な湿度条件に保つよう、ハウスやトンネル換気等の適正管理に努めてください。発病株は早めに除去し、発病場所を中心に早めの薬剤防除を行いましょう。なお、連作や土壌病害が発生した圃場では、除塩を兼ねて、夏季の還元型太陽熱土壌消毒などを実施しましょう。

害虫の対策には、ハウスやトンネルの開口部に防虫ネットを展張して、害虫の侵入を防ぐことが最も大切です。また、害虫の飛来源、ウイルスの保毒源となる圃場周辺の雑草を除草するなど、圃場衛生に努めましょう。さらに、登録のある各種粒剤を播種または定植前に処理し、被害が発生したら早期除去と早期の薬剤防除を実施しましょう。

表 1 ミズナ各種病害に対する主な防除薬剤（平成 27 年 9 月 17 日現在）

対象病害					薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数
立枯病	白さび病	べと病	軟腐病	根こぶ病			
○					ダコニール1000	1,000倍液を3ℓ/m ² 土壌灌注	播種時/1回
○					タチガレン液剤	500倍液を3ℓ/m ² 土壌灌注	播種時/1回
				○	ネビジン粉剤	20～30kg/10a全面土壌混和	播種または定植前/1回
	○				ランマンフロアブル	2,000倍	収穫3日前まで/3回以内
	○		○		ジーファイン水和剤	1,000倍	収穫前日まで/—
		○	○		Zボルドー	500倍	— / —

表 2 ミズナ各種害虫に対する主な防除薬剤（平成 27 年 9 月 17 日現在）

対象害虫					薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数
アブラムシ類	アオムシ	コナガ	ハモグリバエ類	キスジノミハムシ			
○				○	スタークル粒剤	6kg/10a播溝土壌混和	播種時/1回
○					ジェイエース粒剤	6kg/10a作条散布後土壌混和	定植時/1回
				○	ダイアジノン粒剤5	6kg/10a全面土壌混和	播種時または定植時/1回
○				○	モスピラン顆粒水溶剤	4,000倍	収穫7日前まで/1回
○					ウララDF	4,000倍	収穫前日まで/2回以内
		○			コテツフロアブル	2,000倍	収穫3日前まで/1回
	○	○	○		アフーム乳剤	1,000～2,000倍	収穫7日前まで/3回以内
		○		○	アクセルフロアブル	1,000倍	収穫前日まで/3回以内
		○			スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	収穫3日前まで/1回
		○			プレオフロアブル	1,000倍	収穫前日まで/2回以内
	○	○			エスマルクDF	1,000～2,000倍	収穫前日(発生初期)まで/—

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040